

本当の中国？

—— ピエール・パシェ

『引きつった魂』を読む

志 野 好 伸

1. パシェの手法

『引きつった魂 — 現代の中国について』(*L'âme bridée: Essai sur la Chine aujourd'hui*, Le Bruit de temps, 2014) は、作家ピエール・パシェが「本当の中国」⁽¹⁾を把握しようと努めた記録である。彼が中国に向ける眼差しは、2010年に亡くなった著名な政治哲学者クロード・ルフォールの問題関心を引き継ぐものであり、きわめて政治的なものである。「本当の中国」は必ずしも政治的な側面から探られなければならないものではない。経済的な側面、文化的な側面など、別のアプローチも可能である。とはいえ、フランスでは「経済的、財政的、地政学的な分析」ばかりが目につき、「この国(中国)やこの国がどのように統治されているかについての厳密な意味での政治的な考察」(10)が少ないために、パシェはこの本を書いたのである。また、自身の政治への傾斜を、パシェは次のように説明している。「彼」⁽²⁾の政治的な情熱 — その結果として、中国の足枷をはめられ繫縛された *entravé ou bridé* 人々、あるいはその反対に血気にはやり短気な人々に、彼は共感を抱く — は、幼少時代からのもので、父の存在によって、共産主義や後にはアルジェリア戦争についての父との議論によって培われたものだった」(121)。この説明は、「彼」が友人から受けた質問、「なぜタオイズム」⁽³⁾に興味をもたないのか」(119)への回答になっている。そしてこの情熱、「繫縛された人々」、繫縛された魂への共感が、本書執筆の原動力となっている。

しかしこの共感が成立するためには、二つの大きな困難が待ち受けている。一つは、パシェが毛や李など、「実用のために中国人の姓を学んだだけ」(10)で、「中国語も知らないし、中国学者でも何でもない」(15)こと、もう一つは、魂の本質を形成する記憶の場⁽⁴⁾が、中国政府によって破壊されていることである。再開発のための強制立ち退きや、インターネットの検閲などがそれにあたる。2008年の北京オリンピック開催のために大部分が取り壊された北京郊外について、パシェはこう述べている。「過去の抹消、それが北京に到着した最初の数時間で私が出会ったものだった」(102)。「私は、過去の破壊が自分の魂に与えた影響、それぞれの人の魂に与えた影響を測ろうとしている。その過去は記念されることがないばかりでなく、つきとめられても、研究されてもおらず、何らかの制度を生み出すこともない」(101)。さらに別の箇所から引用すると、「あらゆる生は、なにがしかの過去の破壊の上に築かれている。しかし、この悠久の歴史をもつ国では、現代化しようとする意志があまりにもあからさまで、むき出しの権力で制約を加え強制するために、過去に対してなされる暴力がとりわけ強圧的である」(137-138)。

この二つの困難をどう乗り越えるのか。中国語ができないことに関しては、「他の言語による情報源があるし、助けてくれる友人もいる」(15)。ではなぜ外から、中国のことを見ているだけではだめなのか。「果てしない高速道路」を走る車窓から見えるオリンピックのために「破壊された街区の墓場」、墓場の上に建設された「魂のない場所」、端的に「無」である場所(131)に、実際に赴かなければならないのか⁽⁵⁾。少し長いが、やはりパシェ自身の言葉を引用しよう。

この北京滞在はいい思いつきだったのだろうか。彼は一体ここで何を見聞きしようとしているのだろうか。新聞、とりわけ香港や台湾、アメリカの新聞を読んですでに知っていることの他に何があるのか。これらの新聞は、中国語のインターネット上の情報網に出てくる興味深いもの、活動家や大学人、弁護士のインタビューの中でも面白いものを、ほぼたちどころに訳してくれているのだから。

彼は他のどこでもなく、ここで道に迷い方向感覚を失いたかったのだ。一年以上前から強く関心を抱いてきたこの国の首都で。また予想されたとおり、本当に起こっていることについて、上層部でなされる決定、なされるであろう決定について、外から知るよりもわずかしき知りようの

ない現場で。(108-109)

現場に出向いたからといって、何か特別な情報が得られるわけではない。インターネットの検索も厳しい状況では、外からの方がよくわかることもある。それでもパシェは中国で実際に「道に迷い方向感覚を失う」ことを、残された胡同の中を歩くことを選ぶ。「暑さの中、骨を折って一人で歩いているとき、また、都市の中心の果てしない高速道路を走っているとき、私は過去に、その不在に自分を結びつけなくてはならなくなる」(114)。なぜなら、不在に身を置くことで、はじめて「政治的なもの *le politique*」(190)に触れることができるからだ。パシェは中国の権力について、「把捉できない *insaisissable*」という形容詞をつける(151, 174)。「中国人の魂の生に足枷をはめる、不可解で把捉できない権勢」(172)といった言い方がなされる。それはまた「顔のない権力」(129)とも表現される⁽⁶⁾。中国の権力はさまざまな禁止を発令する。「芸術家も活動家も機会さえあればこの禁止に言及するが、禁止そのものは、提示することも、真っ向から異議を唱えることもできない」(53-54)。これが中国の権力のかたちであり、全体主義について考察したルフォールの言葉を用いれば、権力の場とは、「空虚の場」(12)である⁽⁷⁾。顔のない権力、把捉できない権力によって生み出された「魂のない場所」、「無」である場所に赴くことで、パシェは権力を感じ取り、権力によって足枷をはめられ繫縛された魂の声を聞こうとするのだ。

パシェは、『引きつった魂』の中で、さかんに中国人の顔に言及している。『引きつった魂』は「接近」「彼方」「帰還」の三部に分かれているが、「接近」の中の一章が「中国人の顔」と題され、その「ヨーロッパ人でも、アフリカ人でも、アメリカ人でもない」顔が描写されている。「中国人は感情によって心を動かされるのをやめると、顔をこわばらせるわけではないが、静けさがその顔を被う」。わずかな動きで感情を表す中国人の顔のうち、パシェが中でも注目するのが、眼、まぶた、蒙古襷である。その眼は「私たちヨーロッパ人にとってあまりに意外なもののなので（有名な「蒙古襷」*pli épicanthique*）、私たちの目と変わらぬ同じ動きをするとは思えない」。蒙古襷のある眼は、フランス語で *les yeux bridés* と言い、パシェもこの語を使っている(24)。彼が本書の題名を *L'âme bridée* としたのは、bridé のこの用法とかけてのことにながいない。すなわち、パシェは、中国人の蒙古襷のある眼を接近の糸口として、彼らの繫縛された（＝引きつった）魂に迫ろうと

するのである。その顔は「穏やか paisible」(105)で、その視線は「つつましやか discrètement」(111)である。「中国人は、彼らの魂の秘められた感情を、見えないままの状態で大事に守り、静かでそれ自身のうちに閉じた自若ぶりを私たちに示している。そして、それが私たちを魅了するのだ」(27)。こうした書きぶりは、東洋を他者として神秘化するオリエンタリズムにも思えるが、これがパシェの率直な感情なのだろう。

このような感情をもった「中国語も知らないし、中国学者でも何でもない」フランス人が、中国に入り込もうとするのは並大抵ではない。主として中国に滞在している状況に基づく論述部分が、「彼方」と題されているのも、中国との隔たりを感じさせる表現である⁽⁸⁾。パシェは隔たりを無理に縮減しようとしたりはしない。「彼方」は、「到着」「幹部学校」「個人の生」「インターネット」「大通りで」「食事、夕食」「国泰」⁽⁹⁾「三人のヒロイン」の各章で構成されている。その中の二章、「大通りで」「食事、夕食」は、基本的に第三人称を用いて綴られており、他の章が第一人称を用いるのと顕著な違いを見せている。「個人の生」と「国泰」の章は、画家を訪問した際のやりとりが主な話題となっているが、そこでは通訳もあり、閉ざされた空間⁽¹⁰⁾で、パシェは豁然に交流している。「彼」⁽¹¹⁾と私は共通の言語をもたなかったが、彼は自分が理解し実現することのできた愛想のよい美しさを、私と共有したいという強い欲望をもっていただけでなく、その背後にあるもの、ある男の歴史、ある家族の歴史、破壊され再生を願う世界の歴史を共有したいと願ったのだ。両者が交わす会話は「本質的に無音であるが中身の濃い」(64-65)ものであった。そして国泰の黒い眼の光は、「蒙古髯のある切れ長の眼によって守られ、中国人ではない私たちの眼が上下のまぶただけで、あまりにも見えすぎて情報過多になっているのとは異なる」(128)。「蒙古髯」はここでは魂の会話を妨げるのではなく、余分な情報を遮断することで魂の交流をたやすくする役目を果たしている。パシェは、アンリ・ミショーの「魂は泳ぐことを好む」という言葉を引用しているが(22)、この二つの章⁽¹²⁾では、魂同士が制約の少ない状態で比較的自由に泳いで交流しているようである。

それに対して、この二つの章には含まれた三章のうちの「インターネット」の章は、交流を遮断される体験をもとにしている。Facebook にアクセスできないことは予期されたことだが(79)、インターネットをなおも使用し続けることで、パシェは次のような感覚をおぼえる。一見、検閲はほぼ自動的なものに思えるが、「より関心を寄せようとしたり、パリからのニュースを

追いかけておいたりしていると、制限がその分いっそう細かくなって、権力が懸念している主題や個人に応じて、制限が常に更新されているのに気づく」(86)。当局によるこうしたアクセス制限は、自分が監視されているような錯覚を生み出すだろう。

次の章「大通りで」は、いささか唐突に、次のように始められる。

ここ北京に、一人のフランス人。好奇心はあるが、話し言葉も書かれた言葉もわからず、オリンピック以来近代化され画一化されたこの都市で、ほんのわずかの目印しかもっていない男。(104)

この章とそれに続く「食事、夕食」の章では、先述のとおり、基本的に第三人称が用いられる。その修辭的効果は、中国語を解さない筆者が通訳のいない状況で感じる孤独感や、周囲の中国人からのよそよそしさを演出していると言える。だが単にそれだけではないだろう。「食事、夕食」の章の末尾は次のように締めくくられている。

パリジャンであるこの男は、心温かく愛想のよい友人たちに、彼の見聞をたっぷり話したいと思うだろう。もうすぐ彼の滞在も終わりだ。もうすぐパリだ。そこで人は党の監視と支配から逃れる。しかしその監視と支配を忘れたいとは思っていない。(122)

この箇所を読めば、「インターネット」と「大通りで」との間に読者が感じる断絶には、連続性も埋め込まれていたことがわかる。すなわち、「大通りで」以下二章で第三人称が使われるのは、単に筆者の孤独感を高める役目をしているだけではない。パシェは、第三人称を用いることで、「彼」を監視・支配する視線について考察する審級、彼への監視・支配の仕方を考察している私の審級を確保しているのだ。「彼」が「ここで道に迷い方向感覚を失う」ことで、それを強いる政治空間を「私」は描くことができる。こうした叙述方法は、「把握できない権力」を、外部から批判するのとは異なる仕方であぶり出すために採用されたものである。

2. 選ばれた中国人

パシェの手法を確認した上で、自身の能力と中国当局の妨害という二つの障碍を乗り越えて、どこまで「本当の中国」に迫れているかを、あらためて問うことにしたい。『引きつった魂』の中で、パシェはたくさんの中国人の名を挙げている。鄧小平や習近平といった政治家を除くと、反体制派と目される活動家や芸術家⁽¹³⁾がほとんどである。煩を厭わず、近代以降の人物を初出順になるべく網羅的に列挙してみよう（作品名で日本語訳を記していないものは、日本語訳や日本公開がない、または日本語訳が中国語と同じもの）。

閻連科（Yan Lianke）。作家。『日光流年』（フランス語題：*La Fuite du temps*）、『為人民服務』（日本語題：人民に奉仕する、フランス語題）が言及されている。

高行健（Gao Xingjian）。作家。『靈山』（フランス語題：*La Montagne de l'âme*）、『一個人的聖經』（日本語題：ある男の聖書、フランス語題：*Le Livre d'un homme seul*）が言及され、後者の一節の紹介がなされている（77）。前者の『靈山』について、パシェは、「本当の中国」を見失って「高行健が言うように、「靈魂の山」に登攀したい」（99）と述べている。

莫言（Mo Yan）。作家。『豊乳肥臀』（フランス語題：*Beaux seins, belles fesses*）、『蛙』（日本語題：蛙鳴、フランス語題：*Grenouilles*）が言及されている。パシェは、2011年に北京で開かれた学術会議で莫言の講演を聴いている。また、59頁の注で、莫言がノーベル文学賞を受け取りに行ったことに対して、艾未未や魏京生が批判したことを書き留めている。

戴思傑（Dai Sijie）。作家。『巴爾扎克与小裁縫』（日本語題：小さな中国のお針子、フランス語題：*Balzac et la petite tailleuse chinoise*）が言及されている。

婁燁。映画監督。「頤和園」（日本語題：天安門、恋人たち、フランス語題：*Une jeunesse chinoise*）が言及されている。

賈樟柯（Jia Zhangke）。映画監督。「三峡好人」（日本語題：長江哀歌、英語題：*Still Life*）が言及されている。

劉曉波（Liu Xiaobo）。民主活動家、作家。2010年ノーベル平和賞受賞。彼が起草した「〇八憲章」や論文「猪の哲学」（日本語題：豚の哲学、フランス語題：*La Philosophie du porc*）が言及されている。

王兵 (Wang Bing)。映画監督。「鉄西区」(フランス語題: *À l'Ouest des rails*)、「三姊妹」(日本語題: 三姊妹 雲南の子, フランス語題: *Les Trois Sœurs du Yunnan*)、「夾辺溝」(日本語題: 無言歌, フランス語題: *Le Fossé*) が言及されている。

趙亮 (Zhao Liang⁽¹⁴⁾)。映画監督。ドキュメンタリー映画「上訪」(日本語題: 陳情, フランス語題: *Pétition, La cour des plaignants*) が数度にわたって言及されている。

楊絳 (Yang Jiang)。作家。『幹校六記』(フランス語題: *Mémoires de l'école des cadres*) が言及されている。夫の銭鍾書 (Qian Zhongshu) についても触れられている。

魏京生 (Wei Jingsheng)。民主活動家。1979 年から 1997 年まで、18 年間投獄される (途中の仮釈放, 再逮捕を含む)。

廖亦武 (Liao Yiwu)。詩人, 作家。自身の拘留体験を綴った『六四: 我的証詞』(フランス語題: *Dans l'empire des ténèbres*) が言及されている。パシェは 2013 年にパリで開かれた, 廖亦武の著作の出版記念会で会っている。

李必豊 (Li Bifeng)。詩人。廖亦武の友人。

劉震雲 (Liu Zhenyun)。作家。『温故 1942』(フランス語題: *Se souvenir de 1942*) が言及されている。

馮小剛 (Feng Xiaogang)。映画監督。劉震雲の『温故 1942』を映画化した (英語題: *Remembering 1942*)。

艾未未 (Ai Weiwei)。芸術家。組写真「打破漢代陶瓮」(日本語題: 漢代の壺を破壊する, 英語題: *Dropping a Han Dynasty Urn*) のほか, 北京国家体育場 (鳥の巣) の設計に加わったこと, 2008 年の四川大地震で被害を調査する運動を行ったことなどが言及されている。

韓寒 (Han Han)。作家, 有名ブロガー。2012 年 9 月 29 日付の『ル・モンド』によれば, そのブログは五億回の閲覧を数えた (93)。

梅蘭芳 (Mei Lanfang)。民国期より一世を風靡した京劇俳優。

黃賓虹 (Huang Binhong)。民国期より活躍した画家。

齊白石 (Qi Baishi)。民国期より活躍した画家。

傅雷 (Fu Lei)。翻訳家, 美術評論家。

巴金 (Ba Jin)。作家。『家』(フランス語題: *Famille*)、『子夜』(フランス語題: *Nuit glacée*) が言及されている。

于堅 (Yu Jian)。詩人。長詩「0 檔案」(フランス語題: Dossier zéro)の一節が引用されている。

陳光誠 (Chen Guangcheng)。盲目の民主活動家で「赤脚律師」(はだしの弁護士)と評される。一人っ子政策による墮胎の強制などを批判。

慕容雪村 (Murong Xuecun)。作家。『原諒我紅塵顛倒』(フランス語題: *Danse dans la poussière rouge*) が言及されている。

劉福堂 (Liu Futang)。海南島で活動する自然保護運動家。2012 年に逮捕される。

張大力 (Zhang Dali)。画家。パシエに、打ち壊された北京の街の姿を記録した自分の書籍二冊を見せる⁽¹⁵⁾。

李玉民 (Li Yumin)。翻訳家。パリでも北京でもパシエと会う。ユーゴーの『ノートルダム・ド・パリ』を中国語に訳す。

蔣方舟 (Jiang Fangzhou)。1989 年生まれの若手作家。

陳冠中 (Chen Guanzhong)。香港の作家。『盛世 中国 2013 年』(日本語題: しあわせ中国 盛世 2013, フランス語題: *Années fastes*) が言及されている。

アイリス・チャン (Iris Chang)。『The Rape of Nanking』(日本語題: ザ・レイプ・オブ・南京, フランス語題: *La Vile de Nankin*) が言及されている。

胡傑 (Hu Jie)。映画監督。ドキュメンタリー映画「尋找林昭的靈魂」(日本語題: 林昭の魂を探して, 英語語題: *In Search of Lin Zhao's Soul*) が言及され、パシエは「魂」という言葉に注目している。林昭 (Lin Zhao) は、反右派闘争で 1958 年に投獄され銃殺された女子学生。パシエは、アイリス・チャン、林昭、文革時代に毛沢東を批判して投獄・処刑された張志新 (Zhang Zhixin) を「三人のヒロイン」として扱っている。

楊繼繩 (Yang Jisheng)。研究者。大躍進時代の欺瞞を暴いた『墓碑』(日本語題: 毛沢東 大躍進秘録, フランス語題: *Stèles*) が言及されている。

グドゥップ (Gudrup)。チベットの作家。中国当局に抗議を示すため 2012 年 10 月焼身自殺。

何志華 (He Zhihua)。長沙の村民。高速道路建設による立ち退き補償を求めて北京に陳情に行き、受け入れられずに帰村したところを、ローラー車に轢かれて死亡。副村長と口論になり、ローラー車の前に身を横たえ抗議し

たのに対し、副村長がローラー車の前進を命じた。

張思之 (Zhang Sizhi)。著名な弁護士。

方洪 (Fang Hong)。薄熙来をブログでからかい、拘束される。

許志永 (Xu Zhiyong)。弁護士。方洪の弁護を担当。新公民運動を展開。

胡佳 (Hu Jia)。民主活動家。陳光誠の友人。

韓東方 (Han Dongfang)。『中国劳工通訊』において、労働者運動を展開。

インターネットの海を泳ぐように、パシェは多くの中国人に言及しながら論をすすめる。問うておきたいのは、ここに選ばれた中国人は偏っていて、中国の一面をしか代表していないのではないかと、ということである。確かに、パシェの理解する意味での魂は「『普遍的』ではない」し、「国民的」でも「民族的」でもない (191)。だから、中国の一面しか代表していなくても、パシェの試み自体が破綻しているわけではない。ただし、「魂は個人的なものか」というと、それもパシェは疑う。魂は「その人に割り当てられているが、それはその人自身のためでもあり、みんな tous のためでもあるのだ」 (191)。「みんな」とは誰か。パシェが挙げる中国人たちはどのような一面を代表しているのか、それはやはり問われなければならない。パシェの偏向が、西洋の民主主義を規範として、その規範を中国にあてはめることで生じているとすれば、彼の試みは結局、外から、「香港や台湾、アメリカの新聞を読んですでに知っていること」を確認しているだけなのではないか、わざわざ中国に身を置いてみる必要はなかったのではないか。さらに言えば、先に指摘した「東洋を他者として神秘化するオリエンタリズム」と「西洋の民主主義を規範」とする価値観の確認に終始しているのではないか。

「帰還」の部の最初の章である「正義なき国」の冒頭、パシェは、北京で「陳情団」を見かけなかったことを残念がる。遠くからでも見たかった、趙亮の映画「上訪 (陳情)」を通してではなく、この眼で見たかった、と述べる。それに対して北京の友人が、「見世物ではないぞ」と厳しくパシェに忠告したことも、率直に記されている (147)。とはいえ、この助言がパシェに響いた様子はない。「魂から魂へ」向かうような共感を、パシェが陳情団に抱こうとしていたことは間違いないだろうが、その視線が「見世物」を見るような特権的なものでもあることをパシェは自覚していなかった。この一件は、パシェの立場を象徴的に示すものと言えよう。

パシェは中国人の眼にこだわったが、筆者が『引きつった魂』の中で最も印象に残った視線を最後に記しておく。「大通りで」の章に次のような場面

がある。「彼がすれ違う見知らぬ人々、彼が路上で写真にうつす人々は、顔を背けるわけでも、彼をじっと見るわけでもない」。パシェはこの視線を「つつましやか discrète」な好奇心と表現している (112)。同様の視線は、「彼方」の部の末尾にも描かれている。すなわち、陳情団を見たかったと語る「帰還」の部の冒頭の直前であり、パシェの視線と通りすがりの人々の視線とは好対照をなしている。

私たちは、通行人や自転車に乗った人々の好奇のまなざしのもとで、文学について語った。彼らは教授らしい老人男性と若い中国人女性の会話を目の当たりにして驚いていた。しかし寛容さと慈愛が好奇心より上回った。(144)

通りすがりの中国人のこのような視線、寛容さと慈愛によって、パシェと中国人女性との会話をやりすごすつつましやかな視線、これも「本当の中国」の一つであり、「政治的なもの」を考察する端緒となりうるものである。外から批判しているだけでは、こうした視線は決してすくい取られることはない。魂の交流をするすべのない人々の視線が肯定的に描かれていることで、『引きつった魂』は陰影に富む中国論になっていることを強調して、本稿を閉じることにしたい。

* 本稿は、JSPS 科研費（課題番号：17H02280）による研究成果の一部である。

《注》

- (1) Cf. 「本当のもの？ 私はそれを自分の周りに、また自分の中に探す。数ヶ月にわたって新聞の切り抜きを集めたり、インターネットのサイトを閲覧したりしたが、私は本当の中国を、中国の味わい、中国が見せる諸感情を、私にとっての適切な中国の姿を見失ってしまったのだ」(99)。以下、『引きつった魂』からの引用は、頁数のみを括弧内に記す。
- (2) ここで「彼の Sa」とあるのはパシェ自身のことである。本書の大半は第一人称の「私 je」を用いて叙述されているが、「大通りで」「食事、夕食」の二章だけ、すなわち 104 頁から 122 頁までは、「あるフランス人」の話として、第三人称で語られている。この問題については、後述。
- (3) フランス語でタオイズム taoïsme は、通常、いわゆる老荘思想と道教双方を含む。ちなみに本書のエピローグ中でも、パシェは、「私は毛沢東主義よりも、もっと自分の関心を引くタオイズムに興味を持った方がよいのだろう」と

漏らしているが、すぐさま自身の考えを否定し、「政治は自分の進む道の上にあって行く手を阻んでおり、私は政治に関心を持つべきなのである」(187)と述べている。

- (4) Cf. 「私たちは本質的なものが、自分たちの中に、記憶の中、意識の中にあると思うことで安らぎを覚える。私たちは記憶や意識の中に、私たちの生にとって本質的なものを大事に守っているのだ。近い者たちと共有しているもの、近い者がその証人となってくれるものの中に、それを大事に守っているのだ」(74)。
- (5) 以下の無や空虚についての考察は、2017年1月21日に明治大学で行われた国際シンポジウム「アジアにおける一個人——ピエール・バシェの作品を読む」においてなされた李金佳(Li Jinjia)氏の発表「不寝番の中国旅行——感性の政治の試み」(Aux aguets en Chine: une expérience en politique sensitive)、および程小牧(Cheng Xiaomu)氏の発表「中国旅行記における魂について」(À propos de l'âme dans un récit de voyage en Chine)に負うところが大きい。『引きつった魂』p. 113も参照。
- (6) 一方で、権力は一つの顔ではなく、複数の顔を持つ、とも言われ、紙幣の上に印刷された毛沢東の顔もその例に数えられる。こうした現象は「権力の明らかな脱個人化 dépersonnalisation」と表現される(174-175)。
- (7) 例えば、クロード・ルフォール、『民主主義の発明——全体主義の限界』、渡名喜庸哲・太田悠介・平田周・赤羽悠訳、勁草書房、2017年、91頁を参照。
- (8) 1974年に中国を訪れたジュリア・クリステヴァは、中国人女性の顔について次のように記述している。「われわれを意に介していないことをはっきり表わしているようなかの女たちの、すべすべした、温和な、敵意はないが近づきにくい顔、顔。そこには、敵の爆撃を気づかって暖炉に被せる覆いのように身体を包んでいる、その青灰色の衣服によっていっそう強められている取り付けようのないよそよそしさ、しなやかで脆い冷やかさが感じられる」(『中国の女たち』、丸山静・原田邦夫・山根重男訳、せりか書房、1988、p. 258)。あわせて、1930年から31年にかけて中国を含むアジア諸国を訪れたアンリ・ミショーの次の言葉も参照。「シナ人の眼と鼻と耳と手とはとても小さいのに、それらは彼の存在で満たされていない。彼らは遠く後方にうずくまっている。意識の集中のせいではない。違う。シナ人の魂は凹面状をしているのだ」(『アジアにおける一野蛮人』、『小海永二翻訳撰集2、アンリ・ミショー集Ⅱ』、丸善株式会社、2008、p. 565)。
- (9) 画家の名。Guo Taiと表記されているが、姓が崔で名が国泰なので、本名全体をピンインで表記する場合は、Cui Guotaiとなる。海外の展覧会にも多く出品している油絵画家である。崔国泰氏については、程小牧氏に御教示を賜った。
- (10) Cf. 「中国人同士(ロシア人がそう言うように)魂から魂へと語らうとき、宇宙船の船室のように孤立した場所にいないなければならない」(124)。バシェの友人 Huan 氏が語ったことば。「魂から魂へ」という表現は191頁でも使われ、そこでも「ロシア語で言うように」という修飾句がついている。ロシア語の言い回しがわざわざ参照されるのは、ソヴィエト連邦時代のスターリニズムが、中国を批判的に見るときの参照枠となっているからだろう。

- (11) パシェが訪問した画家。注(5)に記したシンポジウムで、程小牧氏は、この画家が自分の父、程大利氏であることを報告された。
- (12) ちなみに、二つの章のどちらにもミショーへの言及がある。
- (13) パシェは例えば、「画家の作品が直接物事の状態に影響を及ぼすとはこれっぽっちも思っていない」が、国泰の作品から「画家は自由を追い求めていることを理解した」(129)と記している。
- (14) 46 頁, 100 頁, 126 頁は正しく Zhao Liang と表記されているが, 147, 150 頁では Zhang Liang と誤記されている。
- (15) 張大力は、『対話と拆』(対話と打ち壊し)と題した作品集を出版している。